額田王の和へ奉る歌一首

一一二番

古に　恋ふらむ鳥は　ほととぎす　けだしや鳴
きし　我が恋ふるごと

吉野より苔生せる松が枝を折り取りて遣る時
に、額田王の奉り入るる歌一首

一一三番

み吉野の　玉松が枝は　愛しきかも　君がみ言を
持ちて通はく

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇
子を思ひて作らす歌一首

一一四番

秋の田の　穂向きの寄れる　片寄りに　君に寄り
なな　言痛くありとも